

2026 年度 活水女子大学入学式院長祝辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。また、ご家族の皆さま、本日の晴れの日をともに迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。ご来賓の方々にも、日頃からのご支援に深く感謝いたします。

活水学院は、今年で 147 年の歴史を重ねるキリスト教系の学び舎です。大学は来年、校名を「活水大学」へと改め、2028 年度には共学化を迎えることが決まっています。皆さんが在学する数年のうちに、男子学生も後輩として入学してくることになります。しかし、キリスト教の教えに男女の区別はありません。一人ひとりが自由と自立を目指すこと、そして人格者として互いを認め合うことこそが、本学院の教育の土台にあります。

活水学院では、建学の精神である創立者のモットー「知恵と生命との泉 — 主イエス・キリストに掬（むす）べよ」に基づき、毎年学院全体が共に歩む「年間聖句」を選んでいきます。2026 年度の聖句は、使徒パウロがローマの人々に宛てた手紙の一節、「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」という言葉です。

パウロの名は知っていても、どのような人物であったか知らない人も多いでしょう。彼はユダヤ人でありながらローマ市民権を持ち、熱心なユダヤ教徒としてキリスト教徒を迫害していた人物でした。しかし、イエスとの出会いによって心を大きく変え、民族や身分に関わらず「イエスが主である」という救いのメッセージを語り伝えるようになりました。

聖書というと、キリスト教徒だけの物語と思われがちですが、実はパウロのようにキリスト教に反発した人々や、ユダヤ教から異教とみなされたサマリアの人々など、多様な人々の物語が数多く記されています。本学院の名の由来となった「ヨハネによる福音書 4 章」に登場するサマリアの女性も、当初はユダヤ教に強い反感を抱いていました。

パウロは、イエスとの出会いによって「自由と人間性の回復」を初めて見いだしました。当時の宗教の多くは、細かい律法や行いを重ねることで人としての尊厳が得られると教えました。しかし、パウロは厳格な律法を守り続ける自分が、かえってその枠にしばられていることに気づいたのです。

人は弱さを認めたときにこそ強くなれる。自分の罪を認めることで相手に心を開ける。相手の立場に立つことができる。そして最大の落とし穴は「自分こそ正しい」と思い込む態度だ——。パウロは、それが本当の意味での自由を奪う「奴隷状態」であると悟りました。

さて現代は、人工知能（AI）が急速に発展する時代です。こうしたパウロの人間理解は古い考えなのでしょうか。かつて『2001 年宇宙の旅』という映画では、人間と AI が閉じた空間で共存する中で、人間が AI の支配下に置かれる姿が描かれました。

人間関係は、時間をかけて築くからこそ豊かなものになります。しかし、AI が答えてくれた情報をそのまま十分に吟味せずに受け取り、主張するだけでは、機械に心を委ねることになりかねません。私たちは今、コミュニケーションのあり方が問われる歴史上初めての時代に生きています。

大学生活の数年間は、皆さんにとって「人間性の学び」と「知識や知恵の学び」、そして AI を含む「膨大な情報」との向き合い方が問われる貴重な時期となるでしょう。AI から得られる喜びは確かに便利で楽しいものですが、人間的な苦悩や、祈るほどの真剣な思索から得られる喜びとは本質的に異なります。AI に使われる側ではなく、AI を使いこなす側の人間になるにはどうしたらよいのでしょうか。単に結果を利用するだけでなく、その結果を自分で吟味できる人となるのはこれからの皆さんの大きな目標になるでしょう。

活水学院が掲げる「聖書的な自立」とは、奴隷ではなく、自由な思考と行動ができる人を育てる教育です。今年度の学院聖句を、どうか心の片隅に留めてください。そして、友人や教職員との深く豊かな交流を通して、活水学院での学びを実りあるものとしていてほしいと思います。

2026 年 4 月 2 日

活水学院 院長 湯口 隆司